

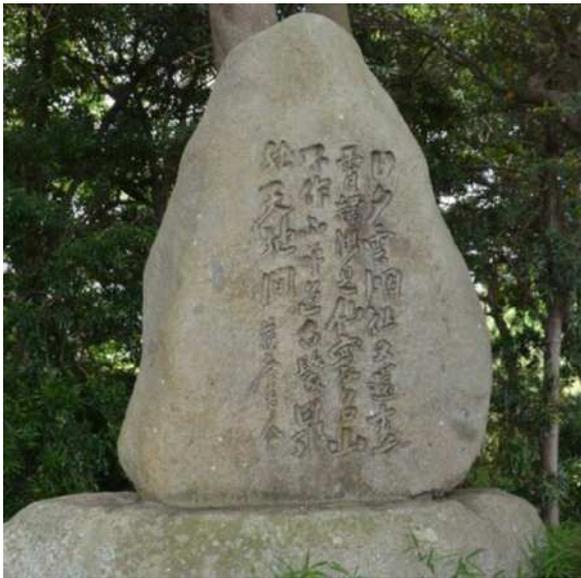


日本平ハイキングコース（「静岡県の絵葉書」 静岡県立中央図書館所蔵）

## 2 徳富蘇峰と日本平

徳富蘇峰（とくとみそほう 1863～1957）は、明治・大正・昭和の三代にわたって活躍したジャーナリストである。蘇峰は昭和3年（1928）、66才のとき『名山遊記』を著した。蘇峰は富士山を眺めるのが大好きで、その序に「何れの方面を旅行するも、恆に富士山を目標としている」と記している。大正10年（1921）以降、蘇峰はたびたび清水へ来て、鉄舟寺に泊っている。翌大正11年（1922）、清水区村松の杉原山に登り、そこからの富士の眺めを絶賛して「富士見台」と名付けた。その後詩碑建立の話が出て、月庵和尚や清水の青年らの尽力で寺に隣接する小丘、杉原山の頂上に建てることとなったが、大正12年（1923）の関東大震災のため中断される。

大正15年（1926）10月24日、静岡県知事、清水・静岡両市長をはじめ大勢の人々が集まって盛大に建碑式が行われた。当日、蘇峰は東京から子・孫など総勢21人を連れて参列している。鉄舟寺山門にはアーチが設けられ花火も上がり、時ならぬ群衆に祝福されて杉原山で除幕式が挙行された。「名山遊記」に「当面には薩埵、清見関の上に、富士山がそびえ、眼下に三保の松原が横たはり、駿河湾から箱根、天城、伊豆の半島一帯は、風帆出没の間にある」と、その眺めをほめている。昭和44年（1969）には、この土地が蘇峰の孫徳富敬太郎氏より清水市に寄贈され、公園となっている。



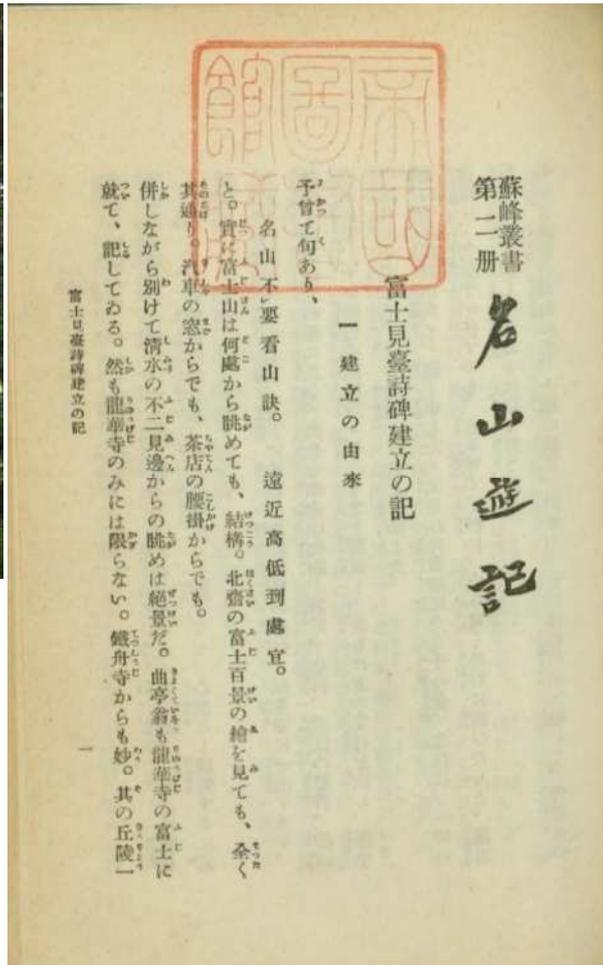
※杉原山山頂の「富士見台」徳富蘇峰詩碑

杉原山の徳富蘇峰詩碑の碑面

「日夕雲烟往又還  
 青霄縹緲是仙寰  
 名山不作不平色  
 白髮昂然天地間  
 蘇峰老人」

碑背の跋文

「富嶽者我大日本之鎮護也神  
 秀氣崇巋然卓立於東海之表  
 而斯地也形勝尤適望嶽乃為  
 賦一詩勒貞珉以志景仰嗟呼  
 予百歲之後魂乎徜徉其長在  
 此也夫  
 大正十五稔七月  
 蘇峰 徳富正敬」

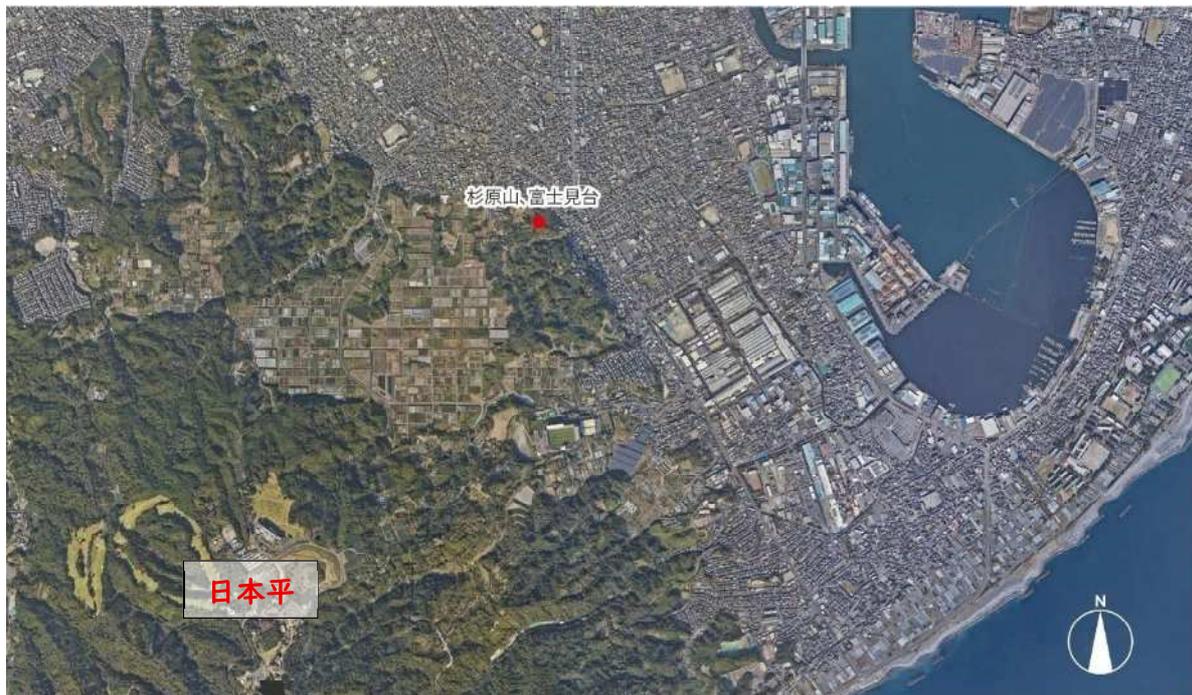


「名山遊記」徳富猪一郎（蘇峰）民友社

出典：国立国会図書館  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1193842/1/7>



徳富蘇峰 出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」  
<https://www.ndl.go.jp/portrait/>



杉原山位置図

出典：地図データ©Google

大正 15 年（1926）10 月 25 日、蘇峰夫妻らは小鹿で松茸刈りを楽しんだ後、草薙神社に参る。そしてその後、日本平へ向かう。蘇峰は日本平を絶賛して言う。「其の眺望に至りては、・・・実に天下第一と申しても差し支えあるまいと思う」と。また「予は斯かる勝地を、此の儘放抛しつつある静岡県人士の、心持が分からぬ」と言っている。

この紀行は、国民新聞の大正 15 年（1926）11 月 4 日号にさっそく掲載され、当時まだ全く知られていなかった「日本平」の名を全国に広めることとなった。そして翌昭和 2 年（1927）東京日日新聞が主催し懸賞付きで「日本新八景」の選定がおこなわれることとなり、日本平はその候補地にあがることとなった。これを受け郷土愛に燃えた「有度村草薙青年団」は、「日本平保勝会」を設立し、票の獲得に奔走した。そのおかげで、「新八景」は逃すものの、平原の部「日本百景」として日本平は入賞し、観光地として脚光を浴びることとなった。

いっぽう昭和 4 年（1929）にアメリカからおこった世界恐慌のあおりを受け、清水市も倒産する企業や失業者が続出した。清水市は失業者対策事業として、日本平山頂まで車で登れるよう、日本平登山道路を計画し、昭和 5 年（1930）から登山道路を作り日本平観光の発展をはかることとなった。そして徳富蘇峰に委嘱して 4 か所の眺望のよい場所を選んで、命名してもらった。昭和 10 年（1935）その 4 か所に、石柱が建てられた。「望嶽台」「超然台」「鐘秀台」「吟望台」である。（『人物が彩る清水』平成 14 年清水市教育委員会より一部抜粋）

# 國民新聞

日 四  
復讐金償還附夕  
止水御伊 入別院編福行發  
町買新高於京東 所行發  
社 聞 新 氏 編 會 武 城



散田書  
子は無言田可

## 静岡遊記 (二) 天下の絶景日本平 蘇峰生

此から山を下り、道を東海道へとり、さらに草薙神社に至る。此處は有度村にて字草薙と云ふ。延喜式内の縣社である。日本武尊が、東國お下りの節、賊起りて野に火を放つたが、尊劍を抜いて之を鎮め給うたのは、即ち此の地方であること云ひ傳へてゐる。その所縁の草薙村、その所縁の草薙神社。

社前には有度村戸塚助役、社司、小學校長、其他諸有志出迎られた。社内は老木鬱蒼、特に八十幾尺と云ふ楠の、空洞を剩し、その中から新樹を生じてゐるのは、尤も奇抜だ。ただ此程の神社にして、何等舊記、古文書の見る可きものなきを遺憾とする。

此れから愈よ日本平に向ふ。此處は日本武尊が草賊を平げ、四方を詠め給うた地と稍せられてゐる。有志諸君は、予及び老妻の爲め、途中迄、自転車の後に附くる荷物車二個を用意せられた。折角の厚意なれば感謝して乗つた。

※『国民新聞 大正 15 年 (1926) 11 月 4 日夕刊』 「静岡遊記 (二)」 徳富蘇峰 この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

### 「静岡遊記 二 天下の絶景日本平 蘇峰生

これから山を下り、道を東海道へとり、さらに草薙神社に至る。此處は有度村にて字草薙と云ふ。延喜式内の縣社である。日本武尊が、東國お下りの節、賊起りて野に火を放つたが、尊劍を抜いて之を鎮め給うたのは、即ち此の地方であること云ひ傳へてゐる。その所縁の草薙村、その所縁の草薙神社。

社前には有度村戸塚助役、社司、小學校長、其他諸有志出迎られた。社内は老木鬱蒼、特に八十幾尺と云ふ楠の、空洞を剩し、その中から新樹を生じてゐるのは、尤も奇抜だ。ただ此程の神社にして、何等舊記、古文書の見る可きものなきを遺憾とする。

此れから愈よ日本平に向ふ。此處は日本武尊が草賊を平げ、四方を詠め給うた地と稍せられてゐる。有志諸君は、予及び老妻の爲め、途中迄、自転車の後に附くる荷物車二個を用意せられた。折角の厚意なれば感謝して乗つた。

身は宛も是れ杜樊川の『遠上寒山石逕斜』の詩中の光景裡にある。但だ此の炭屋の小僧さんや八百屋の小僧さん達が、お得意の家へ、その註文物を運ぶ車に、老人夫妻を乗せ、挽き行く様は、山中であればこそ。若し此れが銀座街頭ならば、全く乞食爺と乞食婆以上の値踏はせられまい。

此邊亦た茶畑が多い。山を拓き、小石を積み、段々畑を作りてゐる。やがて車を捨て、石逕を上り行く。上るに従ひ、茶畑は一變して、野菜畑となり、菜や、人參や、白菜や、大根の類がある。上りつむれば、乍ち駿河灣から伊豆半島を見る。而して大なる峻谷を隔て、削り成したる如き孤峰が、久能山だ。

我等は一步踏み外せば、數百尺の谷底に墜落す可き、馬脊の如き小笹茂れる小徑を通り、漸く日本平に近きつゝ行く。やがて松山やら、小篠野を過ぐれば、一望涯なき茶や、大根畑に出づ。此れが所謂る日本平だ。

此の山上の平地が、幾町歩あるやを詳にせざるも、餘程廣き面積がある。少なくとも大觀兵式位は出来さうにある。而して其の眺望に至りては、賴山陽が耶馬溪ではないが、實に天下第一と申しても、差支あるまいと思ふ。

何たる仕合であらう。富士は全身を露はしてゐる。我等は遠州の御前崎から、伊豆の石廊崎まで、殆んど残る隈なく展望するを得た。薩陞嶺や、清見關や、興津や清水や、三保や、静岡や、龍爪山や、文殊山や、安倍川や、大井川や、若しくは天城山や、箱根一帯の山や、悉く指顧の中にあつた。老妻は十國峠の眺望以上だと申したが、予も或は然らんとした。

諸君は予に向て、戯れに此處にも詩碑は如何かと云ふから、人間は足るを知ると貴ぶ。杉原山にてさへも、餘りに結構過ぎると思ふ。まして斯る天地の大文章に對しては、人間は唯だそれに隨喜感悦すれば澤山であると、笑つて答へた。

予は斯る勝地を、此儘放抛しつゝある静岡縣人士の、心持が分からぬと申したい。之を大遊園地とするの可否などを議論するよりも、せめて此の日本平に上る道を作り、道標にても立てたらば、如何かと思ふ。而して此文を讀むの君子も、予に誑された積りにて、必らず一度來觀せられよ。予は獨り自から斯る好景を私するに忍びず、敢て之を天下同好の君子に告ぐ。

予は返す返すも諸君が、予を日本平に案内せられたるを謝す。實は足痛の爲めに、プログラムを取消んとの議もあつたが、予は好景と聞いては、脚の一本位は失うてもと申したから、諸君も喜んで案内せられた。凡そ世の中に馳走と云ふ馳走の中にて、好景を觀る程、有り難きものはない。

(大正十五年十月二十六日午前六時 静岡大東館に於て)

大 毎 東 日 主 催  
景・八・新・本・日

**賞品**

賞品は、本報社が、大日本平の地を、調査し、その地を、全国的に紹介せんとするものでございまして、私達は、この両新聞社の企てが、「日本平」を紹介する絶好の機会と信じまして、「日本平保勝会」を起し、有度山を繞る関係村民の御賛同を得て、この有意義なる然も又となき機会の企てを御後援賜はりたいと存じます。御承知の通り、「日本平」は、東に靈峰富士を望み、眼下に駿河湾を見下し、前面久能山の嶮を控へ、西すれば静岡市及安倍川の河口より御前崎の先端にあたり、遠望は實に筆紙に盡し難く、昨年徳富蘇峰先生の御来遊の砌り、「眞に世界の絶景なり」との讚辞を與へられた事も宜なる哉であります。必ずや諸賢の御後援によりては、平原中の第一位の栄冠も我に歸する事の無謀なる算段でないと思ひます。何卒郷土の勝地を紹介する絶好の機会をお含み下さいまして、この保勝会を御後援下さいませ願ひ申し上げます。

**規定**

（一）本報社が、大日本平の地を、調査し、その地を、全国的に紹介せんとするものでございまして、私達は、この両新聞社の企てが、「日本平」を紹介する絶好の機会と信じまして、「日本平保勝会」を起し、有度山を繞る関係村民の御賛同を得て、この有意義なる然も又となき機会の企てを御後援賜はりたいと存じます。御承知の通り、「日本平」は、東に靈峰富士を望み、眼下に駿河湾を見下し、前面久能山の嶮を控へ、西すれば静岡市及安倍川の河口より御前崎の先端にあたり、遠望は實に筆紙に盡し難く、昨年徳富蘇峰先生の御来遊の砌り、「眞に世界の絶景なり」との讚辞を與へられた事も宜なる哉であります。必ずや諸賢の御後援によりては、平原中の第一位の栄冠も我に歸する事の無謀なる算段でないと思ひます。何卒郷土の勝地を紹介する絶好の機会をお含み下さいまして、この保勝会を御後援下さいませ願ひ申し上げます。

**宛名**  
大阪府東淀川区三輪本町  
今津化学研究所懸賞係宛の事

**地補景八新**

（一）本報社が、大日本平の地を、調査し、その地を、全国的に紹介せんとするものでございまして、私達は、この両新聞社の企てが、「日本平」を紹介する絶好の機会と信じまして、「日本平保勝会」を起し、有度山を繞る関係村民の御賛同を得て、この有意義なる然も又となき機会の企てを御後援賜はりたいと存じます。御承知の通り、「日本平」は、東に靈峰富士を望み、眼下に駿河湾を見下し、前面久能山の嶮を控へ、西すれば静岡市及安倍川の河口より御前崎の先端にあたり、遠望は實に筆紙に盡し難く、昨年徳富蘇峰先生の御来遊の砌り、「眞に世界の絶景なり」との讚辞を與へられた事も宜なる哉であります。必ずや諸賢の御後援によりては、平原中の第一位の栄冠も我に歸する事の無謀なる算段でないと思ひます。何卒郷土の勝地を紹介する絶好の機会をお含み下さいまして、この保勝会を御後援下さいませ願ひ申し上げます。





※「大毎東日主催 日・本・新・八・景」（「日本新八景」の懸賞記事(候補地・賞品・規定等)）『東京日日新聞』昭和2年6月7日朝刊 画像提供：毎日新聞社

『この好機に吾が日本平を』必勝を期して起こった有度村草薙青年団（昭和2年5月12日東京日日新聞静岡版）の新聞記事にあるように、郷土愛に燃えた地元「有度村草薙青年団」が中心となり、「日本平保勝会」を設立し、周辺市町に活動を開始し、投票に奔走した。

### 「日本平」保勝会設立趣旨書

「今回東京日日新聞社及び大阪毎日新聞社主催で日本新八景を募集する事になりましたので私達は玄玄に當有度山の高地「日本平」を平原に投票して全国的に紹介せんとするものでございまして 私達はこの両新聞社の企てが「日本平」を紹介する絶好の機会と信じまして「日本平保勝会」を起し有度山を繞る関係村民の御賛同を得てこの有意義なる然も又となき機会の企てを御後援賜はりたいと存じます 御承知の通り「日本平」は東に靈峰富士を望み眼下に駿河湾を見下し前面久能山の嶮を控へ西すれば静岡市及安倍川の河口より御前崎の先端にあたり遠望は實に筆紙に盡し難く昨年徳富蘇峰先生の御来遊の砌り「眞に世界の絶景なり」との讚辞を與へられた事も宜なる哉であります 必ずや諸賢の御後援によりては平原中の第一位の栄冠も我に歸する事の無謀なる算段でないと思ひます 何卒郷土の勝地を紹介する絶好の機会をお含み下さいましてこの保勝会を御後援下さいませ願ひ申し上げます」

平原としては日本一だ  
郷土愛に燃ゆる平野代議士

「日本平」投票に最も熱心に奔走している憲政会の平野光雄代議士は有度村耕地整理組合長栗田豊一郎氏とともに十日午後本社支局を訪問し必勝計画について打ち合せる處があったが「日本平」について語る『未だ余り世間に知られていないが一度行った事のあるものは誰でもその絶景に全く驚く位だ東にはいはゆる世界一の名山富士の霊峰を仰ぎ東南には三保の松原を抱く清水湾一帯からはるかに大島三原の煙をのぞむ事が出来る今まで世間に知られないのが不思議な位である僕は郷土に対する義務としてどうしても當選させなくてはならぬ松本知事も先般同地に遊んで全くいいところだと景色の話の出る度に毎に賞讃している何といつても平原としては日本一である』



『この好機に吾が日本平を』必勝を期して起こった有度村草薙青年団 (昭和2年5月12日東京日日新聞静岡版)

# 富士高女も 日本平へ

## 投票と決定

新八景「日本平」の投票熱は日を追ふて白熱化し有度村青年團員は文字通り東奔西走各方面の遊説方を求めてゐるが静岡市富士高等女学校でも「日本平」が日に増し有望となるのに鑑み先づ實地踏査した上で極力投票する事となり十三日午前八時全校生徒六百余名は職員に引率されて同地に遠足を試みた結果何れも「日本平」黨となり各自投票する事となつた

印刷しきれぬ  
日本平の投票  
(昭和2年5月20日東京日日新聞静岡版12面、静岡県立中央図書館所蔵)

富士高女も日本平へ投票と決定 (昭和2年5月15日東京日日新聞静岡版12面、静岡県立中央図書館所蔵)

# 印刷しきれぬ 日本平の投票

## 最高點を確信さる

前代議員加藤定吉氏は廿八日日本平投票のため十九日朝わざく本部の有志村遊説を訪れ一萬票の投票を持ち込み静岡電報社長加藤一衛氏も五千票を申し込む等一東の投票が盛出したため印刷部では印刷し切れず紙面不足状態に依

最高點を確信さる  
維するの状態で一日日本平黨の清水入江町長、加藤定吉氏は静岡電報社の従業員五十余名が必死の遊説で集めた投票も豊富あるので最高點で集計するものと見られてゐる

## 板挟みの三島

本誌もこの日本平入票は行つて

# 郵便貯金や 白米を寄贈

## 白米の運動猛烈

白熱化した新八景運動  
白米の運動猛烈  
白米の寄贈  
白米の寄贈  
白米の寄贈

## 目標に

日本平に登り  
萬歳を三唱した  
有度村の幹部たち

# 日本平に登り 萬歳を三唱した

## 有度村の幹部たち スタンプを押しきれぬ兩局

新八景投票最後の廿日朝日本平投票事務所の有度村遊説は正に投票の山でこれが整理に大騒ぎを演じたが一方これを投票された江尻清水兩郵便局では職員を動かしてスタンプを押してゐるが到底廿日中に押し切れないので大半は静岡郵便所に持ち運ばれたほどで投票総数八萬五千票を突破し平野では最高票で入選の確信が出来たので午前中大體の事務を終り平野代議士井上村長手塚助役田新地整理組合長等を初め有度村青年團幹部は午

## お禮の演奏會

お禮の演奏會  
けふ城内校で

日本平に登り萬歳を三唱した有度村の幹部たち (昭和2年5月21日東京日日新聞静岡版12面、静岡県立中央図書館所蔵)



審査圏内入選数では全国第一位 (昭和2年6月7日東京日日新聞静岡版8面、静岡県立中央図書館所蔵)

入選数では全国第一の名譽 (昭和2年7月7日東京日日新聞静岡版8面、静岡県立中央図書館所蔵)

# 入選数では 全国第一の名譽

八景投票で知られた  
大縣下の名勝地  
入選は愉快だ  
審査員内務省長官



# 清水市公報

號三三二第

定 部 一  
價 五 年 一  
銀 限 金 共 限 印

人行發金局編  
印 定 局 經  
人 刷 印 西  
吉 眞 貝 四  
五八五五五五五

昭和十年三月九日印刷  
昭和十年三月十日發行  
發行所 清水市役所  
電話 三三〇〇番

## 日本平登山路開通



靈峰富士を正面に仰ぐ日本平は其の雄大端麗なる風光に依つて近来著しく名声を高めつつあるが、本市では未だ頂上に至る自動車道路のなかつたのを遺憾とし、省線清水駅より龍華寺線を連絡して直ちに自動車を駆つて日本平頂上に至る遊覧コースの開拓を計画し昭和七年十二月工事に着手爾來二年有餘の日子を費やして先月末日遂に此の大事業の完成開通を見るに至つた。同路線は総延長三千九百四十四間一分幅員二間半総工費は九萬二千八百餘円である。

尙ほ本市では新路線に沿つて千變万化する眺望のうち特に優れた地点四個所の展望台及び其の名称の選定を本市に縁故深き文豪徳富蘇峰先生に依頼中望岳台吟望台鐘秀台超然台の命名を得たので先般先生の筆になる標柱を建設した。(写真は建設せられたる展望台標柱)

【目次】

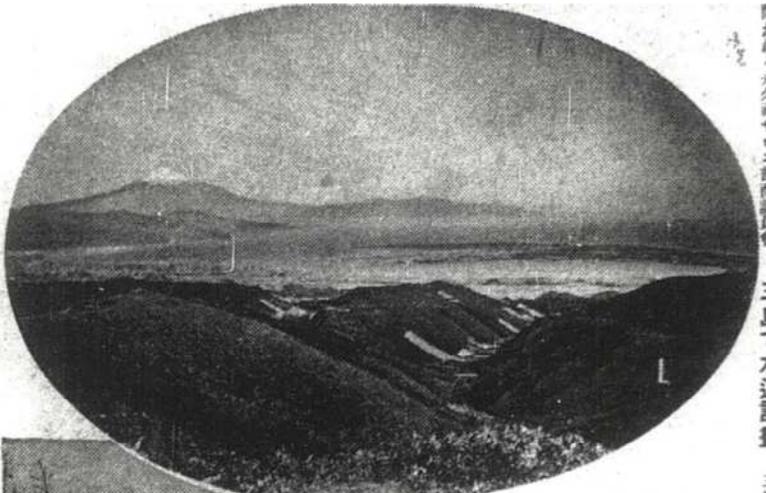
- ◆日本平登山路開通……………一
- ◆通 示……………二
- ◆誌 報……………三
- ◆重 要 日 録……………四
- 市 會……………五
- 市 事 務……………六
- 文 書……………七
- 戸 籍……………八
- 生 活……………九
- 職業紹介事業……………一〇

開戦討伐美談——現役兵の善行表  
彰——軍機春日及第一掃海隊入港  
清水商業學校原中學校卒業  
生渡前前宣誓並送別式——市立  
圖書館發報——愛國婦人會清水市  
分會巡迴家庭婦二月分事業成績

清水市公報（昭和10年3月10日）日本平登山路開通

「靈峰富士を正面に仰ぐ日本平は其の雄大端麗なる風光に依つて近来著しく名声を高めつつあるが、本市では未だ頂上に至る自動車道路のなかつたのを遺憾とし、省線清水駅より龍華寺線を連絡して直ちに自動車を駆つて日本平頂上に至る遊覧コースの開拓を計画し昭和7年12月工事に着手爾來二年有餘の日子を費やして先月末日遂に此の大事業の完成開通を見るに至つた。同路線は総延長3千9百44間1分幅員二間半総工費は9万2千8百餘円である。

尚ほ本市では、新路線に沿つて、千變万化する眺望のうち特に優れた地点四個所の展望台及び其の名称の選定を本市に縁故深き文豪徳富蘇峰先生に依頼中望岳台吟望台鐘秀台超然台の命名を得たので先般先生の筆になる標柱を建設した。(写真は建設せられたる展望台標柱)



日本平の風景

# 雄大な景觀美

## 日本平の偉容整ふ

蘇峰翁により四名所選定

ドライヴ・ウェイの完成近し

幹部に不満で——を申し合せ、岐阜縣でも建設中で、相模ボブリンは染色の製法度の高  
 静岡市民の足——市内、スズラン白——遠州も人線、ボイルをはじめ内、インダフレン染で染出したが、

蘇峰翁を中心とした雄大な景觀美を  
 誇る日本平は清水市から  
 ドライヴ・ウェイが完成すれば、  
 遊覧客が最近とみに増加し、この雄  
 絶たる風景の彫刻台として新名所  
 にも選定を行つた【望岳台】は山

染料を代用したボブリンを製造し  
 たことから現品返送と遠州輸出  
 の中、真正面に秀麗な景  
 を望み足下に明麗な清水港を俯瞰  
 し遊覧客が先づその第一歩を留む  
 るところ【望岳台】は清水よりの  
 山麓で富士の望遠はもとより伊豆  
 箱根の遠山から愛宕山の遠望、さ  
 ては南アルプスの雄姿も遙にその  
 雄姿を現し三保を取入れて明瞭清  
 見深の長汀曲浦もさながら箱庭の  
 如き眺め、望岳台の名に背かず、  
 で前面には富士、三保の美を擁し  
 背面は眼下に久能の峽谷を望み静  
 岡の市街を遠望し更に遠く駿河



雄大な景觀美日本平の偉容整ふ  
 蘇峰翁により四名所選定（昭和  
 10年2月2日東京日日新聞静  
 岡版12面、静岡市立中央図書  
 館所蔵）



名勝指定範囲（特別地区：ピンク色、保全地区：緑色）と徳富蘇峰選定4つの眺望地点

望嶽台  
望嶽台：「山の中腹どころで真正面に秀峰富岳を望み足下に明媚な清水港を俯瞰し、遊覧客が先づその第一歩を留むる所」と当時の新聞（昭和10年2月2日東京日日新聞静岡版12面）に掲載。現在の、日本平登山道（旧道）の東斜面に舌状に突き出した台地上にあり。登山道（旧道）に接しており、遠くに富士山と眼下に清水市街と清水港を望む。」



望嶽台の石碑

吟望台ぎんぼうだい：「清水よりの山頂で、富士の景観はもとより伊豆箱根の連山から愛鷹山の遠望、さては南アルプスの銀嶺も遥かにその雄姿を現し三保を取り入れて明鏡清見瀧の長汀曲浦もさながら箱庭の如き眺め、吟望台の名に背かず。」と当時の新聞（同上）に掲載された。現在は、日本平公園夢テラス展望回廊付近の広場にあり。蘇峰はその広場から霊山の雲表に浮かび、三保の松原が駿河湾に腕を伸ばして清水港を抱き、伊豆連山は呼べば応えん情景に、思わず藤田東湖の「秀でては不二の嶽と為り、巍々として千秋に聳ゆ」を口ずさみ、わが大和民族の国民性は、これの霊山に由って代表すると、感嘆を禁じえなかった。



日本平吟望台付近（「静岡県の絵葉書」 静岡県立中央図書館所蔵）

鐘秀台しょうしゅうだい：「久能よりの山頂で、前面には富士・三保の美を擁し、背面は眼下に久能の峡谷を望み、静岡の市街を遠望し、更に遠く駿河湾の碧海の彼方に、御前崎白亜の灯台が絵のように霞む」と当時の新聞（昭和10年2月2日東京日日新聞静岡版12面）に掲載された。現在は、公園区域外にあり、崖近く行くことは困難な場所にある。



日本平鐘秀台より富士の遠望（「静岡県の絵葉書」 静岡県立中央図書館所蔵）

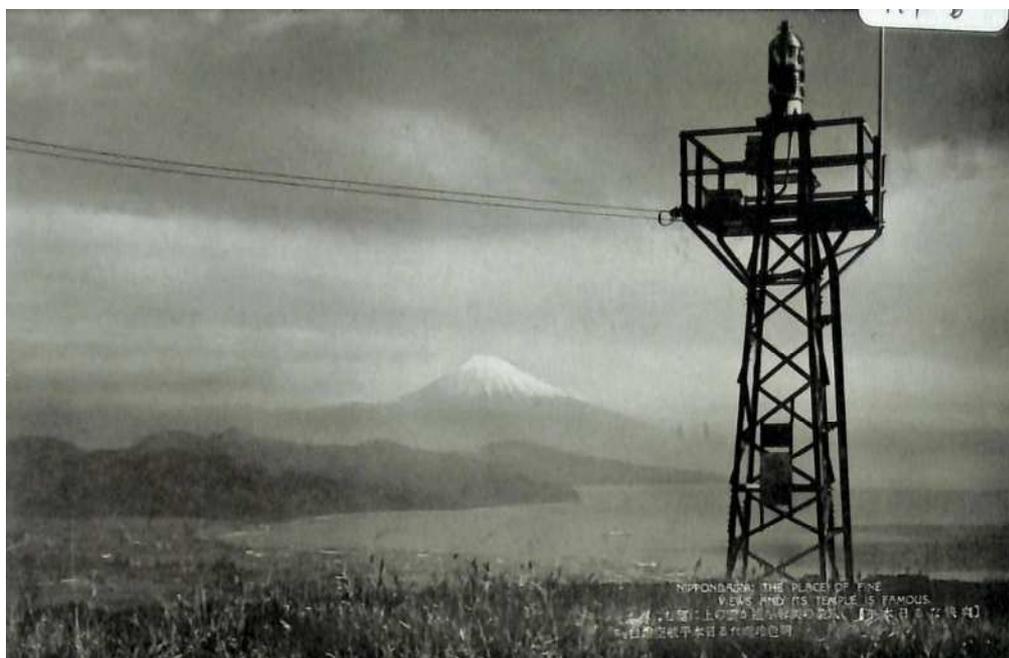


鐘秀台の石碑

ちょうねんだい

超然台：「日本平の最高峰で吟望台と鐘秀台の三角の頂点に立ったところ、四顧さえぎるものなき雄大な眺望は、正に超然台の名にふさわしい」と、当時の新聞（同上）に掲載されている。また昭和48（1973）年3月1日「民友」には「以前は、同場所に、燃料に枯れ枝を拾い、食料に木の実、草の根を求めるものがあったが、今はほとんど無く、兎も通れない荒蕪であったが、一度頂きに立てば、霊山は固より、遠くは南アルプス連峰に至るまで展望自在。御前崎、石廊崎に囲まれた駿河湾を眼下に静岡、清水の市街、竜爪山、安倍、大井の両川、天城、箱根の山々はすべて指顧の中である。」とその景色を評している。

現在は、公園区域外の私有地にあり、突出した丘陵で南面が崖地となっており、公園区域との間に深い谷があるため、公園からのアクセスもなく、容易に行くことは困難となっている。



「超然台」に建てられた日本平航空灯台（昭和10年10月点灯）  
（「静岡県の絵葉書」 静岡県立中央図書館所蔵）



超然台の石碑



事（昭和 25 年 9 月 17 日毎日新聞静岡版 6 版(4)、静岡県立中央図書館所蔵マイクロフィルム）には「名月を鑑賞するとともにネオンに彩られた静岡、清水両市街の夜景を心いくまで観賞することになった（中略）地元民を通じ日本平の真価を広く宣伝しようとするもの」とあるように、官民一体となって投票運動に尽力した。

昭和 25 年の日本観光地百選平原の部第一位では、他の部門の観光地とともに、「観光地百選シリーズ」記念切手（24 円：清水港と富士山、8 円：茶畑と茶摘み娘と富士山）が発行された。



投票は日本平へ！観光地百選（昭和 25 年 9 月 14 日毎日新聞静岡版日刊 6 版静岡 3、静岡県立中央図書館所蔵）

追込み必勝の固め（昭和 25 年 9 月 15 日毎日新聞静岡版日刊 6 版(4)、静岡県立中央図書館所蔵）



堂々首位を確保（昭和 25 年 9 月 17 日毎日新聞静岡版 6 版(4)、静岡県立中央図書館所蔵）



観光静岡の面目躍如名勝七カ所、堂々の入選（昭和 25 年 10 月 11 日毎日新聞静岡版日刊 7 版(4)、静岡県立中央図書館所蔵）

昭和 32 年（1957）には久能山とを結ぶロープウェイが建設され、同年 6 月には NHK のテレビ塔からの放送がはじまった。

こうした動きに対し、同年 7 月 1 日には、久能山下根古屋地区を含んで仮指定が継続され、昭和 34 年（1959）6 月 17 日に日本平が名勝に指定される。

また名勝としてはばかりでなく、昭和 12 年（1937）の時点で日本平山頂及び周辺部 88.5ha が、都市計画法に基づく「日本平公園」として都市計画決定されていること、またその後、日本平周辺地域においては、文化財保護法なども含め、いくつもの法規制によって一定の保護保全の体制が確立されていることを示しているとともに、それぞれの目的に沿った整備事業が想定され、その際には相互の調整が不可欠になる。過去に検討されてきた幾度かの整備計画構想はそれを示すものである。

昭和 30 年代に入ると観光施設の整備が相次ぎ、その後交通網の整備やレクリエーション需要の拡大に支えられ、観光客の増大が続き、昭和 52 年（1977）にピーク（約 280 万人）を迎える。

既に昭和 32 年（1957）の仮指定の時点には、日本平と久能山とを結ぶロープウェイの開通、NHK テレビ日本平放送所の設置及び民間テレビ放送会社による土地買収、静岡県による公園整備のための用地買収などの日本平をめぐる社会状況が大きく変化したが、文化財指定によって日本平の優れた価値を大規模開発行為から守ろうとしたものであり、その意味で指定の役割は大きい。

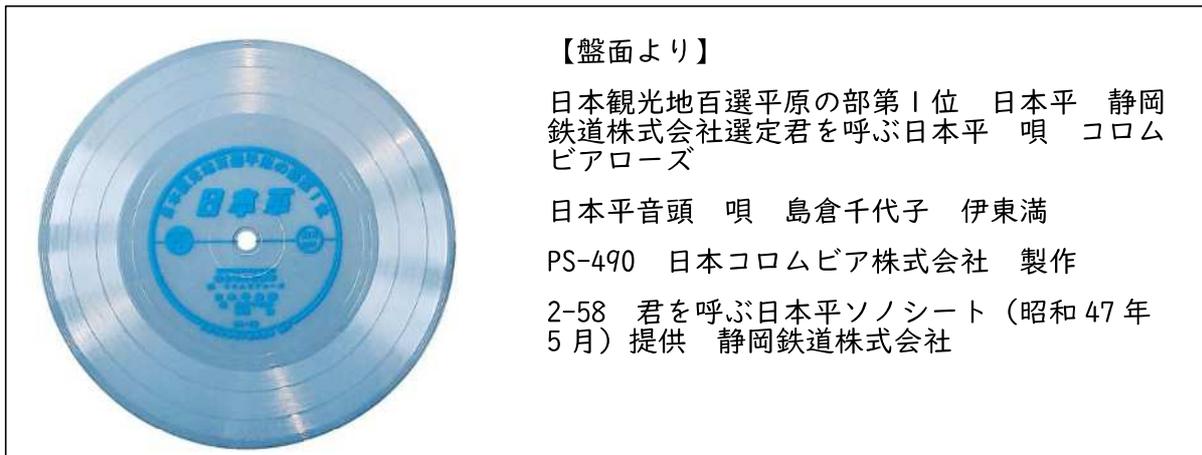
昭和 36 年（1961）には、「君を呼ぶ日本平」や「日本平音頭」などの日本平の歌や踊りが作られた。「当時バスガイドが歌って、観光客を喜ばせた」というコメントがユーチューブに残る。



日本平登山道開鑿記念碑  
（清水市長、昭和 9 年建立）



昭和 25 年日本観光地百選首位当選記念碑



【盤面より】

日本観光地百選平原の部第1位 日本平 静岡  
鉄道株式会社選定君を呼ぶ日本平 唄 コロム  
ビアローズ

日本平音頭 唄 島倉千代子 伊東満

PS-490 日本コロムビア株式会社 製作

2-58 君を呼ぶ日本平ソノシート（昭和47年  
5月）提供 静岡鉄道株式会社

静岡市・清水市観光協会推薦、静岡鉄道株式会社選定、日本コロムビア製作・提供

昭和47年（1972）からは、日本平山頂部の適切な維持管理組織として、「日本平県立自然公園運営協議会」が発足し、令和7年度（2025）現在もその活動を続けている。

行政と民間業者で組織された団体であり、日本平関連の開発事業等についても、情報交換、連携推進、地元意向把握等の面で重要な役割を担っている。また、山頂部での実際の維持管理業務等も行っており、名勝の保全にも直結している。

こうした歴史的社会的な状況の中で、最も重要な日本平の本質的価値は、富士山を眺める好適地であるばかりか、四周の展望を愛でる場所でもあり、しかも複数の展望地点がそれぞれ眺望を構成してきた事実にある。そこで、周遊しながら展望するという日本平の特性が自ずと理解される。

都市部に隣接する日本平は、裾野にはみかんや茶の農地が広がり、里山的な性格も併せ持って、人々の生活と密着してきている。頂上付近に県営駐車場整備され、平成16年（2004）に日本平パークウェイが無料化され、観光の面でも、市民にも一層親しい日本平に変化してきた。

そして、平成17年（2005）、乱立していたテレビの送信塔が地上波デジタル放送開始に伴い除却され、デジタル鉄塔1基に集約された。

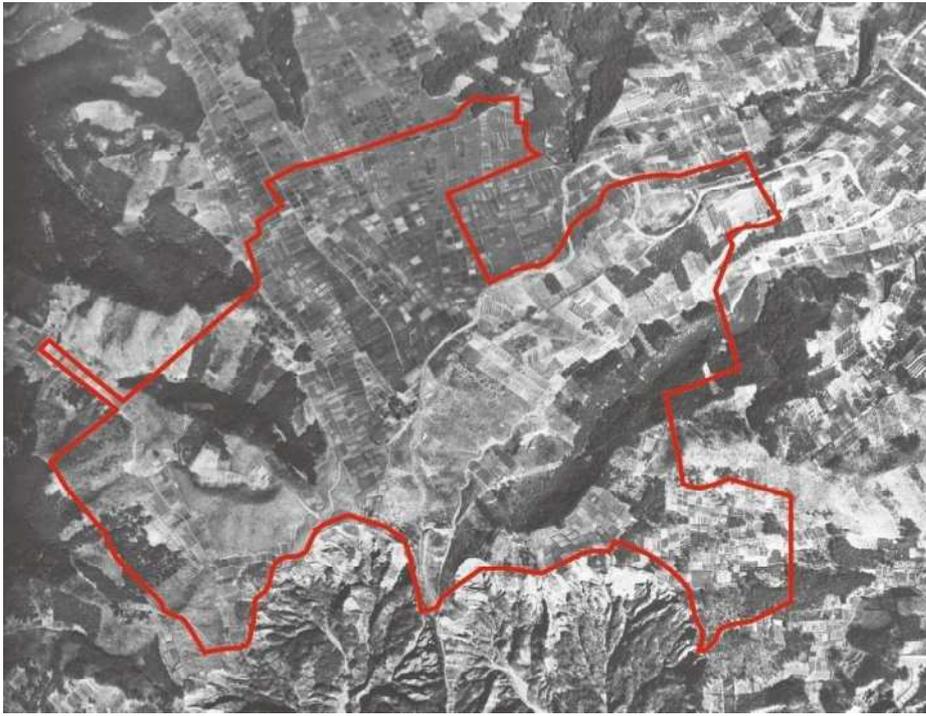
平成22年まで、名勝日本平の保護手法を従来の「凍結的保存」に準拠してきたため、山頂部の開発や改変は進まなかった半面、計画的な土地利用の誘導や整備が行われてこなかったため、観光施設の撤退や農業の衰退に伴い、園内景観の荒廃が見られるようになってきた。

平成19年（2007）、「日本平公園基本計画」を策定。平成22年（2010）、「名勝日本平保存管理計画」改定。

（本節1～3は、『日本平の謎を追う—2000年度研究報告—』静岡県立庵原高等学校郷土研究部2000年を基本的に参考にし、図版や地図などもその多くを同書より転載した。P35「寿留嘉土産」上巻、P36「駿河國有渡山一圓之図」（全体図）・「駿河國有渡山一圓之図」（日本平拡大図）、P37「大正4年久能山附近案内図」、P41「杉原山頂の「富士見台」徳富蘇峰詩碑」、P45「東京日日新聞 日本新八景」、P48「日本百景 東京日日新聞」などで※で示した。なお、同部顧問の北村欽哉氏より御教示・御助言をいただいた。）

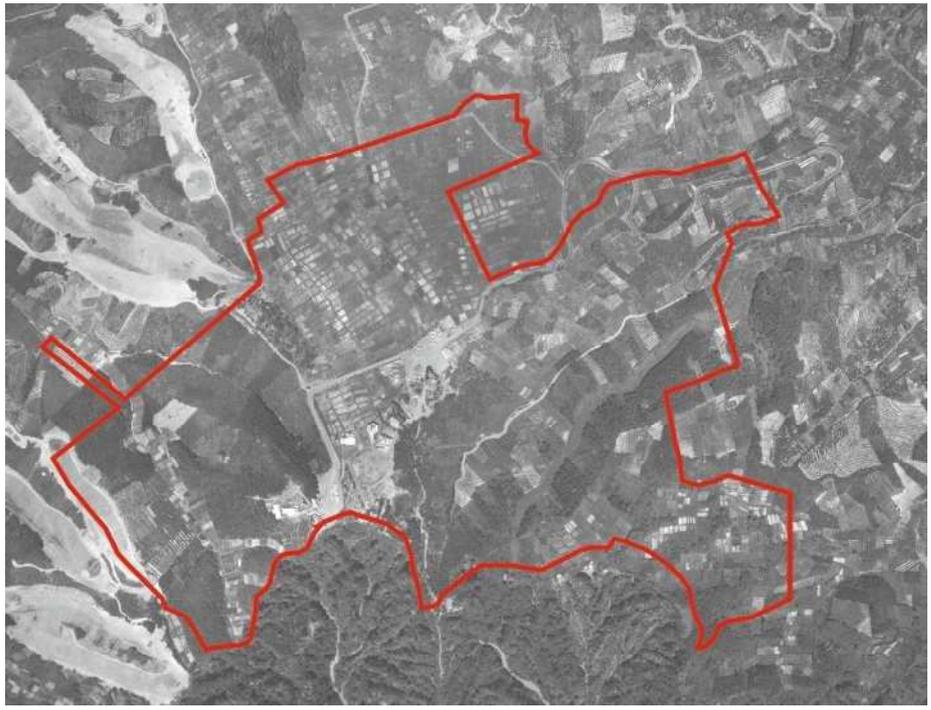
#### 4 空中写真から見る地歴

[昭和21年]

<p>空中 写真</p>	
<p>現況 重図</p>	
<p>履歴</p>	<p>日本観光地百選平原の部1位（昭和25） 日本平県立（自然）公園選定（昭和26）</p>
<p>概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・山頂部敷地のほとんどが農地。地図上では茶畑となっているが、写真からはその他作物との混在をみることができる。</li> <li>・山頂部周辺で現在、樹林地となっている箇所にも農地が多く見受けられ、この時代の日本平では遮るものがほとんどなかったと推測できることから、記録のとおり優れた眺望地であったことが伺える。</li> <li>・道路として確認できるのは、清水側の旧道から現駐車場、川崎家前を通り、NHK鉄塔からロープウェイに下る道が確認できる。</li> <li>・施設は、川崎家前の山頂部入口箇所に、それらしきものを見ることができる。</li> </ul>

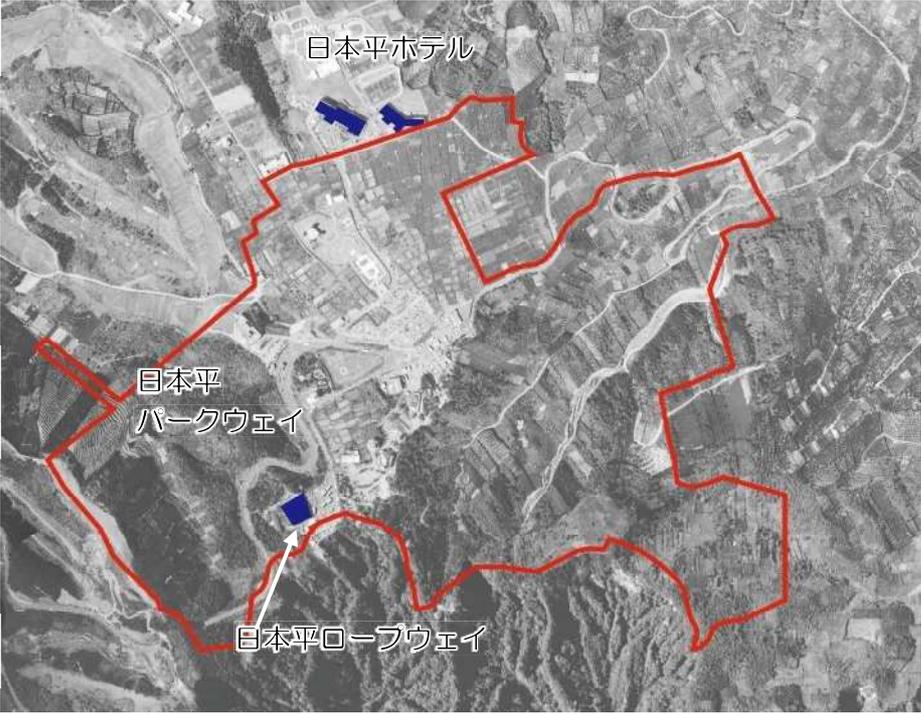
出典（写真）：国土地理院

[昭和 36 年]

空中 写真	
現況 重図	
履歴	清水屋・NHK（昭和 30） ロープウェイ・川崎家・野鳥の家・静岡放送（昭和 32） 日本平ゴルフ場（昭和 36）
概要	<ul style="list-style-type: none"><li>・山頂部の開発が見られる。旧道から現在のパークセンターに至る道路と、その中間の現在の駐車場位置に駐車場らしき施設が見られる。</li><li>・山頂部付近に広場らしき空間が見られ、これと駐車場間に建物らしき施設が点在している。</li><li>・日本平ホテル東側の樹林が伐採されており、その後の写真から推察すると新たな樹林のための施業であったものと推察される。</li><li>・野鳥の家北側に樹林地が見られるが、聞き取りからマツ林であったものと推察される。</li></ul>

出典（写真）：国土地理院

[昭和 44 年]

<p>空中 写真</p>	
<p>現況 重図</p>	
<p>履歴</p>	<p>日本平ホテル本館・同美術館・日本平パークセンター（昭和 39）          日本平ホテル別館・日本平お茶会館（昭和 42）          テレビ静岡（昭和 43）／パークウェイ（静岡側：昭和 39 清水側：同 47）</p>
<p>概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本平ホテルの建設によって農地が大きく減少。ホテル芝生広場の範囲は、聞き取りからゴーカート等のレジャー施設であったようだ。</li> <li>・駐車場も概ね、現在の範囲にまで拡張しており、吟望台からお茶会館に至る範囲が開発され、建物が点在する様子が見て取れる。</li> <li>・但し、野鳥の家北側の農地は、この時点でもわずかに残っている。</li> <li>・静岡側パークウェイが開通したことで、清水側旧道と連続し、アクセス性が飛躍的に改善された様子がわかる。</li> <li>・外周部では、さかんに樹林が成されている様子がわかる。</li> </ul>

出典（写真）：国土地理院

山頂の変遷  
[昭和21年]

<p>空中 写真</p>	
<p>現況 重図</p>	
<p>概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・吟望台や鐘秀台周辺では、ほとんど樹林が見られず四周眺望の地であったことが伺える。</li> <li>・更に東展望台から鐘秀台に至る斜面地にも樹林は見受けられない。</li> <li>・その他の大半が茶畑と思われる農地であった。</li> <li>・パークセンター駐車場位置では、山頂部から連続する道路が見られ、地形的にも山頂から下る一連の斜面地であったものと推察される。</li> </ul>

出典（写真）：国土地理院

[昭和 36 年]

空中 写真	
現況 重図	
概要	<ul style="list-style-type: none"><li>・吟望台や鐘秀台周辺の樹林の成長が見られる。樹種は不明（現在はコナラを主体とした雑木林）</li><li>・デジタル塔付近に広場風の空地が見られ、その北東側（富士山方向）に 2 棟の建物が連なって見える。</li><li>・川崎家前の駐車場から山頂部への入口らしき園地が、ほぼ現在の形状で見ることができる。</li><li>・ロープウェイに至る道路と駐車場が整備されている。</li></ul>

出典（写真）：国土地理院

[昭和 44 年]

<p>空中 写真</p>	<p>野鳥の家</p> <p>NHK 鉄塔</p> <p>日本平ロープウェイ ・パークセンター</p> <p>吟望台</p> <p>SBS 鉄塔</p> <p>川崎家</p> <p>お茶会館</p>
<p>現況 重図</p>	
<p>概要</p>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 吟望台や鐘秀台周辺及び東展望台に至る斜面地の樹林が、ほぼ現況の状態になりつつある。</li><li>・ 静岡側パークウェイの開通により、現在の駐車場付近は全て駐車場として開発。また、野鳥の家東側の梅林やテレビ鉄塔の建つ範囲が広場園地として開発されている。</li><li>・ 新たな建築物が建つと同時に、いくつかの建物が撤去され空地化。</li><li>・ 山頂部ではテレビ鉄塔北側農地が最後まで残り、この範囲が耕作放棄地となって現在はササヤブが繁茂している。</li></ul>

出典（写真）：国土地理院

昭和 25 年（1950） - 昭和 44 年（1969）

- ・山頂部の開発がはじまる。
- ・静岡鉄道株式会社を中心に山頂の観光開発が進められる。昭和 25 年（1950）5 月に「久能山・三保めぐり」（のちに「日本平・久能山・三保めぐり」）の定期遊覧バス、平成 26 年（1951）4 月に路線バス日本平線の営業開始。しかし日本平と久能山は屏風谷と呼ばれる断崖によって隔てられ、両者を回遊するには大幅な迂回が必要であり、観光地としては不便な地理状況にあった。そのため、静岡鉄道株式会社はロープウェイの建設を計画し、昭和 32 年（1957）5 月に全長 1065 メートルの「日本平ロープウェイ」が開通し定員 26 人のゴンドラで日本平と久能山を 6 分で移動できるようになった。

静岡鉄道株式会社は、ロープウェイの完成とともに、バス路線の増強、休憩施設や駐車場の整備を急ぐなど観光客の受け入れ体制を整え、昭和 35 年（1960）3 月に国鉄が東京―静岡間の日帰り準急「日本平号」の運転を開始すると 50～60 両もの観光バスを稼働しなければならないほどの大盛況となった。昭和 36 年（1961）2 月には、第 2 回静鉄観光まつりにおいてコロムビア・ローズ（初代）の「君を呼ぶ日本平」（河西新太郎作詞、米山正夫作曲）と島倉千代子・伊東満による「日本平音頭」（池田誠一郎作詞・岩瀬ひろし補作、上原げんと作曲）が発表され、観光誘客を盛り上げた。

昭和 39 年（1964）3 月、静岡県道路公社によって日本平パークウェイが開通。これに合わせて静岡鉄道株式会社では日本平山頂部に鉄筋コンクリート三階建て、総面積 1620 m<sup>2</sup>の建屋に収容人員 700 人の大食堂をはじめ地元名産品店や休憩室、屋上展望台などを備えたレストハウスである日本平パークセンターをオープンし、観光客の受け入れ体制を整えた。観光客を受け入れるさまざまな施設の整備によって、日本平は一躍、年間 200 万人を超える観光客が訪れる観光地に発展した。

（参考：『静鉄グループ百年史 過去から未来へのメッセージ』令和 2 年）

昭和 49 年（1974） - 昭和 53 年（1978）

日本平ホテルができる。日本平美術館ができる。日本平パークウェイができる。テレビ放送鉄塔が複数建つ。お茶会館、月日星、川崎屋がたつ。

昭和 54 年（1979） - 昭和 58 年（1983）山頂部

テレビ放送用鉄塔が 5 基たつ。ロープウェイ駐車場に大型バスが多数停車している。日本平ロープウェイのパークセンターがたつ。

平成 17 年（2005）

日本平デジタル放送所（日本平デジタルタワー）が山頂部にたつ。アナログ放送終了に伴い、日本平公園山頂部に静岡県のテレビ放送を送信する集約電波塔であるデジタルタワー 1 基がたてられ、その後日本平山頂に 5 基たてられていた紅白のテレビ放送用鉄塔が撤去され、景観が向上した。

平成 27 年（2015）、山頂部の公園整備を前倒して実施することとなり、計画が見直され、日本平公園基本計画改定する。

平成 30 年（2018） -

日本平夢テラス展望施設、日本平夢テラス展望回廊ができる。日本平ホテル前交差点がラウンドアバウトになる。道路の整備がすすむ。大芝生広場の整備がすすむ。公園駐車場の整備がすすむ。



現在の山頂部周辺（静岡市航空写真・令和4年度撮影）

## 第6節 日本平の人文的環境

### 1 生活・生業

有度山の山頂部は明治期になり開墾された。静岡の温暖な気候、日当たりが良くなだらかな丘陵地を利用して、お茶やミカンがつくられた。

#### (1) 日本平とお茶

##### 【茶畑】

##### ①「やぶきた」発祥の地

「やぶきた」は全国で栽培されるお茶の約70%、静岡県内では、約90%のシェアを占める品種である。「やぶきた」は、明治41年(1908)に旧安倍郡有度村の生まれである杉山彦三郎によって発見・育成された。有度山の麓の静岡市駿河区谷田には、(茶樹)やぶきた原樹/杉山彦三郎記念茶畑(静岡県指定天然記念物)があり、杉山彦三郎の功績が称えられている。

##### ②清水港と茶の輸出

日米修好通商条約締結時、茶は生糸に次ぐ重要な輸出品目であった。静岡市は茶の名産地であったが、鉄道や船で横浜港へ運ばれ輸出されていた。明治32年(1899)、静岡県茶業組合連合会議所の海野孝三郎の尽力により、清水港は日本茶の開港場の指定を受けることとなる。指定を受け、海野孝三郎は静岡製茶再製所の誘致や日本郵船株式会社との交渉など、輸出環境の整備に努め、明治39年(1906)5月、日本郵船の神奈川丸による茶の直輸出が実現した。以降、清水港からの茶輸出は急激に加速し、明治42年(1909)には横浜港を抜き茶輸出日本一となり、大正6年(1917)には、全国茶輸出高77%を占める「お茶の港」となった。昭和12年(1937)、日本平山頂に海野孝三郎の功績を称える碑が設置されたが、清水港お茶輸出100周年を迎えた平成18年(2006)、ゆかりの地である清水港に移設された。

##### ③ちゃっきりぶしと日本平

「ちゃっきりぶし」は、昭和2年(1927)、静岡鉄道(当時、静岡電気鉄道)が狐ヶ崎遊園の開園を記念し、沿線の観光と物産を広く紹介するために、北原白秋に依頼して作詞され、静岡県の民謡として親しまれている。白秋は「唄を通じて特産品が認識され、輸出産業として発展」させる意図を込めて唄の制作を行った。歌詞の4番には、「さアさ、また行こ、茶山の茶つみ、日本平の山の平のお茶つみに。」と「日本平」での茶摘みの情景が描かれており、日本平と茶畑がセットとしてイメージ化されるきっかけになったものと考えられる。

「ちゃつきりぶし」は、昭和 32 年（1957）開催の静岡国体開会式で披露されたことにより、全国に広まり、昭和 36 年（1961）には、全国民謡人気コンクールにおいてトップの栄冠を獲得した。「ちゃつきりぶし」誕生 40 周年にあたる昭和 41 年（1966）、富士山と茶畑を望む名勝日本平山頂の日本平パークセンターの屋上に「ちゃつきりぶし民謡碑」が建てられた。この「ちゃつきりぶし」は、いわば唄をとおした観光戦略であり、静岡の茶や日本平などの静岡の名物・名所を紹介する意図もあった。



チャツキリぶし(茶摘み唄) 4 番 (静岡県立中央図書館所蔵)



日本平の茶畠

山の斜面を利用し到る所緑濃き茶園が発達し駿河の国の風情をいやが上にも高めて居る。  
 (「静岡県の絵葉書」 静岡県立中央図書館所蔵)



日本平と茶摘 (「静岡県の絵葉書」 静岡県立中央図書館所蔵)



日本平茶園にて (「静岡県の絵葉書」 静岡県立中央図書館所蔵)



〔外袋〕 県立公園 日本平と三保風光 (「静岡県の絵葉書」 静岡県立中央図書館所蔵)

(2) 日本平と歌

「有度音頭」、「有度小唄」

「有度音頭（作詞：若杉雄三郎 作曲：大村能章 三味線：豊吉 唄：若原一郎、尾崎幸江 音楽：キングレコード部員）」は、昭和30年（1955）に安倍郡有度村が、清水市に編入することになったことがきっかけで、昭和29年（1954）に有度村の住民が「有度」の名を残すために作った踊り。村人から募集した歌詞の1番に有度山（日本平）が富士や清水港を眺める場所として欠かせないことや、有度の名産がお茶やみかんであることが紹介されている。地元住民が継承活動をしており、地域のお祭りなどで今でも踊っている。「有度小唄（作詞：若杉雄三郎 作曲：大村能章 三味線：豊吉 唄：尾崎幸江 音楽：キングレコード部員）」もあり、「日本平のお茶つみ姿」という歌詞がある。

校歌

静岡市立小中学校124校の校歌を調べたところ、6校（東豊田小学校、宮竹小学校、清水岡小学校、清水飯田中学校、南中学校、清水第四中学校）で「日本平」を含む歌詞を確認した。掲載可能な校歌の歌詞を掲載する。市民が日本平を地域のシンボルとして大切にしていることが、これらの歌から想像できる。

<p>作詞 : PTA / 作曲 : 佐々木すぐる</p> <p><b>日本平</b>の 空高く 富士もほほえみ 夢をよぶ 世界につづく 大空に 希望のつばさ はばたくは ああ われらの東豊田小学校</p> <p>花咲きみのる 丘の上 学びの窓辺は 日に映えて 誠をもとめ 若鳥が 歌声高く むすびゆく ああ われらの東豊田小学校</p> <p>せんだんかおる この庭に 郷土のほまれを うけついで ゆかしく強く 巣立つとき 平和の鐘は なりわたる ああ われらの東豊田小学校</p>	<p style="text-align: right;">清水岡小学校 校歌 作詞 若杉雄三郎 作曲 山口俊郎</p> <p>一、丘はさみどりしろがねの 富士にまむかい立つ子らは よい子すこやか明るい子 すくすく育つふるさと おか、おか、おかよ、わが母校</p> <p>二、もゆる若草、雲はゆく よべよ希望の青い鳥 よい子力を合わせる子 学びのまどに咲く花よ おか、おか、おかよ、わが母校</p> <p>三、寄せるさざなみ、しおのかに かねは希望の空になる よい子よい友なかい子 <b>日本平</b>に陽はうらら おか、おか、おかよ、わが母校</p>
<p>静岡市立東豊田小学校校歌</p> <p>三、朝な夕 <b>日本平</b>は 麗しく 眼下にふるさと 覚は展びる 未拓の広野に 天翔けて われよき社会を 築くなり ああ われらが 飯田中学校</p> <p>二、深剣と 若葉は息吹く 堅き結びの 友垣幾多 力を養い 心を練り 真理の花を 聞かせん ああ われらが 飯田中学校</p> <p>一、東雲に 理想の光 崇く栄え 生くる未来に 心は馳せる 丘に登ゆる わが学舎 自学自修の 精神あり ああ われらが 飯田中学校</p>	<p style="text-align: right;">静岡市立清水第四中学校 校歌 作詞 若杉雄三郎 作曲 中山晋平 編曲 浜田洋通</p> <p>一、真白き富士を仰ぎつゝ、 <b>日本平</b>を背において 緑の日の学び舎に 明るく清く育ちゆく 東海の子ら光あり</p> <p>二、春秋花に風かおる 希望の窓辺若人が 明け暮れはげむ学の道 輝くひとみ青空に 今清新の血はもゆる</p> <p>三、夕への霧は野をこめて 偉人をしのぶ鐘の声 幾度星は変わるとも 文は人なりその哲理 吾現代を超越す</p> <p>四、渺々一路波の乗て のぞみは広し駿河湾 明日の日担う喜びに 理想は高く幸福つる その名ぞ第四中学校</p> <p style="text-align: right;">清水飯田中学校 校歌 活州 政夫 作詞 中村 勲 作曲</p>
<p>静岡市清水飯田中学校校歌</p>	<p>静岡市立清水第四中学校</p>

## 2 伝承、神話、ヤマトタケル伝説

### ヤマトタケル伝説

大和政権が近畿地方から東国に勢力を広げ、日本列島を支配していった様子は奈良時代に編纂された『古事記』や『日本書紀』のなかで、日本武尊などの物語として伝えられている。日本武尊は熊襲の討伐、叢雲の剣の拝受を経て、東海地方へと至る。

『古事記』中巻

「故爾到相武國之時、其國造詐白「於此野中有大沼。住是沼中之神、甚道速振神也。」於是、看行其神、入坐其野。爾其國造、火著其野。故知見欺而、解開其姨倭比賣命之所給囊口而見者、火打有其裏。於是、先以其御刀苜撥草、以其火打而打出火、著向火而燒退、還出、皆切滅其國造等、即著火燒。故、於今謂燒津也。」

【現代語訳】

そして相武国に着いたとき、その国造が倭建を騙して、「この野の中に大きな沼があります。この沼の中に住んでいる神は、ひどく強暴な神でございます」と伝えた。そこでその神を見るため、その野に入った。するとその国造は火をその野原につけた。それで倭建は、騙されたと気づいて、叔母の倭比賣からもらった袋の口を解いて開けて見ると、中に火打石があった。そこでまず刀で草を刈り払い、その火打石で火を打ち出して向い火をつけて、燃え迫って来る火を退けて、その野を無事に出ると、その国造たちを皆斬り殺して、火をつけて焼いた。それで、今もその地を焼津という。

『日本書紀』7巻

「冬十月壬子朔癸丑、日本武尊發路之。戊午、枉道拜伊勢神宮、仍辭于倭?命曰「今被天皇之命而東征將誅諸叛者、故辭之。」於是、倭姬命取草薙劔、授日本武尊曰「慎之。莫怠也。」是歲、日本武尊初至駿河、其處賊陽從之欺曰「是野也、糜鹿甚多、氣如朝霧、足如茂林。臨而應狩。」日本武尊信其言、入野中而覓獸。賊有殺王之情王謂日本武尊也、放火燒其野。王、知被欺則以燧出火之、向燒而得免。一云、王所佩劔叢雲、自抽之、薙攘王之傍草。因是得免、故號其劔曰草薙也。叢雲、此云茂羅玖毛。王曰「殆被欺。」則悉焚其賊衆而滅之、故號其處曰燒津。」

【現代語訳】

この年、日本武尊は、初めて駿河に行かれた。そこの賊が従ったように見せ、欺いて、「この野には大鹿が多く、その吐く息は朝霧のようで、足は若木のようです。お出でになって狩りをなさませ」と言った。日本武尊はその言葉を信じて、野に入り狩りをなされた。賊は、皇子を殺そうという気があって、その野に火を放った。皇子は欺かれたと気づき、火打石を取り出し火をつけて、迎え火をつくって逃れることができた。また一説には、皇子の差しておられる天叢雲劔が、自ら抜けだして皇子の傍の草をなぎ払い、これによって難を逃れられた。それでその劔を名づけて草薙というたされる。皇子